

Title	畿外侯疆祇の書翰その他
Sub Title	Two letters of prince Quong-De and his Japanese friends
Author	竹田, 龍児(Takeda, Ryoji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.319- 328
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0323

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

畿外侯疆樞の書翰その他

竹 田 龍 児

(一)

かつて本誌の四十六卷三号に「越南志士の書翰三通」と題して潘佩珠と阮典の柏原文太郎氏に宛てた書信を紹介したことがある。それら三通の書翰は、何れも早稲田大学の小川博氏が成田史料館所蔵の柏原文書中から発見されたもので、同氏の御厚意によって発表の機を与えられたのであった。その後、柏原文書の再調査に赴かれる小川氏のお伴をして始めて成田史料館を訪れたのは昭和四十九年秋十月のことであった。大野館長は相憎ご不在でお目にかゝれなかったが、司書の小倉博氏が温く迎えて下され、柏原文書を自由に閲覧する許可を与えられたばかりでなく昼食の遇しまで受け恐縮せざるを得なかった。お蔭で未発表の疆樞侯の書翰二通と阮典のそれを一通発見することが出来たのである。

先ず柏原氏に宛てた疆樞侯の書翰の原文を掲げることにする。(読点は筆者が加えたもの)

東畝先生如晤、近来仇人、散布流言、每為離間吾人之計、敵輩在外、又苦於音信不達、經濟為難、零落四處、無收拾之基礎、凡諸欲有作為、漸歸於消極之趨勢、言念及此、憂心如焚、不得不暫作此旅行之举、奈鄙人既到中華、与他当局相見、求他相助、又卻舍而之東、恐於人情上有難甘者、故此行僅為聯絡同伴、使之一德一心、固結團體、靜待時機、及謀台之事已耳、一二月後、当即再東、天相平安、拜会有期、幸毋掛念是荷、惠銀五十元、現已領到、此并叙、即祝

道安

林徳順頓首 十月一日

半紙一枚に記されたわずか十数行の書信に過ぎないが、中国の尺牘に暗い私には可成り手ごわい代物であった。殊に幾つかの中国風に崩してある行書体の文字の解読には手を焼いたが、幸にして同僚の高橋正彦・可児弘明両教授の支援によってどうやら一応判読出来るに至った。こゝに記して感謝の意を表したい。しかもなお二、三充分に解明し得ない点があるので大方の御教示をお願いする次第である。そこでかいつまんで大意を述べれば、近頃仇人（フランス人）があらぬ噂をまき散して仲間割れをさせようと図っています。自分らは本国を離れて外にいたので音信もまゝならず、生活も困難で諸方に零落していて収拾のよりどころとてなく、すべて為さんと思うことはとかく消極的になる有様でそれを思うと心中焼くが如くであります。そのため暫くの間今度の旅行を企てざるを得なかったのです。しかし中国へやって来て当局者と会って援助を求めて置きながら、又そこをすて、東に赴くということは人情として致し難いところであります。それ故に今回の旅行では、たゞ同志と聯絡をとって団結を強化して静かに時機の到来を待った上で、台謀（意味不明）のことに及ばんとするのみであります。一、二ヶ月後には早速また貴国をお訪ね致すつもりです。無事に再会出来る日を楽しみにしております。どうか御放慮被下度、お送り頂きました銀五十元は有難く拝受仕りました。御礼を兼ね貴下の御平安を祈り上げます。

林徳順頓首 十月一日

封筒の表には毛筆で東京小石川区表町百〇五番地柏原文太郎先生 惠展と記されており、消印は判読し難いがどうも横浜局のものらしく、6年10月1日の日付けである。裏面には由横浜筑后丸武並京発と記し、更にその左に船因大風故遅一天、今日始開行と鉛筆で追記している。裏面にも消印があり、それは小石川局のもので8年10月2日の日付けになってい

るが、この8はどう考えても6でなくてはならず、恐らく捺印の際の手ぶれかなんかのためにそうなのであろう。大風のために出帆が一日延びたとあるにも拘らず、スタンプの日付が書翰のそれと同じ十月一日であるのは出帆予定が変更になったことを物語っているにすぎない。封筒の裏面の武並京なる記名は疆樞侯の偽名と認められるが、それとは別の林徳順という文尾の署名もまた侯の好んで用いた中国名であったことはよく知られた事実である。しかも侯は時に林順徳と自署しており、その何れを正しいとも決めるわけにはゆかないのである。

(二)

次に同じ林徳順の犬養木堂に宛てた書翰に眼を移そう。封筒は元のものではなく、当時麴町区下六番町五二に住んでいた犬養毅が一読後柏原文太郎氏に向けて転送したときの角封筒に収められていて、それには麴町、8年12月30日の消印が存している。文面は次の如くである。

木堂先生如照、敬啓者、此次旅行、本擬十月初旬、即当回京、不意到燕之後、既因水土不服、加以寒氣候隆迫、成咳嗽肺炎之症、服藥已弥月余、今雖病根全快、而身体尚在軟弱、擬宜調養二星期、方可上程、大約来月中旬、必能回京面候矣、知関貴注、謹以奉聞、諸徳

珍重即頌

日綏

林徳順頓首

十二月二十二日

木堂先生

謹啓、この度の旅行は、もと十月初旬にすぐにも帰京仕る所存でしたが、思いがけなく北京に参りまして後、氣候風土

に不馴な上、寒気がきびしく咳が出て肺炎の気味に相成り、一ヶ月余り薬を服用致してをりました。今はもう全快しましたがまだ体に勢がつかませぬため、なお二週間ばかり養生した上で出発致し度く存じおります。恐らく来月中旬には必ず帰京仕りお目にかゝれることゝ考えております。御心配をおかけして申訳ございません。謹んで御報せまで。何とぞ御自愛下され度く御平安を祈り上げます。

林徳順頓首

十二月二十二日

この手紙は、さきの消印からみて大正八年十二月に書かれたものと思われるが、柏原氏宛の書信には「一二月後当即再東」とあるところからすると、長期滞在の予定でなかったのが何らかの事情によって二ケ年も在留せざるを得なかったものゝ如くである。その間の事情は不明だが、「ヴェトナム」(新潮社刊)の著者小松清氏は次の如く推測している。

第一次大戦のあいだ、疆樞がずっと中国にいたのかどうか、それを明らかにする文献はのこっていない。疆樞自身が何か手記をのこしておればその期間の生活が判るのであるが、今となつては過去の暗さに蔽われたままである。また存命中、彼もその時代のことを、ついに筆者に語ったことはない。しかし思うに大戦中、或る時期に(恐らく一九一六年ごろ)上海生活をしてから、その後ひきつづいて大戦の終るまで広東にいたのではないかと想像される。戦争中、疆樞が上海でひどい窮乏生活をしたということを筆者も伝えきいたことがあるが、それは潘佩珠や疆樞の庇護者であった国民党領袖の陳其美らによる上海暴動企画が失敗に帰し(一九一五年十二月)、翌一六年五月陳が遂に暗殺されてから後のことではなからうか。

小松氏は更に疆樞が袁世凱の帝制に反対して独立したばかりの広東へまで乗込んだものと推測している。しかし一九一六(大正五)年頃から引続き上海あたりで生活していたというのは事実には反している。一九一七年十月から第一次大戦が終つた翌一八年十一月までではなく一九年(大正八年)に日本へ帰るまで中国に滞留していた蓋然性が強い。「燕に到りて後」と文中に見えているところからすれば、或は小松氏の推測する如く、しばらく広東にいた後さらに北上して五・四

運動での北京にまで脚を延ばしたものであったかも知れない。

大正十四年頃フランスのインドシナ総督府か或は東京のフランス大使館かから外務省に送られてきた Prince Cuong De と題する疆樞侯の行動に関するタイプ用紙八枚からなる報告書が外務省の史料館に存している。それに付された仮訳文をみると、

一九一六年一月一日以降其居ヲ東京ニ定メ支那及安南方面ト通信シ居レリ 公ハ時ニ広東又ハ漢州 (Hang Chow) 在住ノ安南革命黨員ノ訪問ヲ受ケ又之ト会见セン為時ニ自カラ支那ニ赴キ右両市ニ暫時ノ滞留ヲ為シ所用果ツレハ日本ニ帰ルヲ常トス彼ハ現ニ小石川区表町一〇九番地ニ住シ林順徳又ハ高松ト称シ居レリ
云々とあるところからみて、大正六年から八年にかけての頃に侯が中国に在留していたと考えても決して間違いではないような気がする。但し右の訳文中の漢州は杭州の誤りで、当時杭州には潘佩珠や陳有功らがいたのである。

(三)

他の一通は、以前に紹介したことのある留学生阮典から柏原文太郎夫人に宛て、疆樞侯の東京在住の有無を問い合せてきたもので、自筆と思われるペン書きの候文でした。めた書信である。

拝啓初夏の候御家族一同御健壯の由奉敬賀申上候述べ久しく御不沙汰致候甚だ失礼と存し候何卒御容赦被下度願候乍
憚林順徳様尚東京に居候哉手紙にて左記の処に御知せ被下度此段御願申上候也 敬具

陽曆五月十八日

阮典頓首

柏原文太郎先生の奥様机下

U. Yamada

n°—96. Rue Jules Ferry

Hanoi.

Tonkin. Indochine française

封筒は山田商会のもので、表にはハノイ局二八年五月十八日の消印が、裏面にはホンコン局二八年五月二十四日のスタンプが捺してある。一九二八年即ち昭和三年頃には疆樞侯は東京に住んでいたのではないかと思うが今のところまだ確認していない。ついでながらこの書信の中で阮典が疆樞のことを林徳順ではなく林順徳と記していることも注意して置いて頂きたい。阮典自身はいつまで日本に留っていたかは明かでないが、大正十年頃までいたらしいことは、すでに紹介した上海から柏原文太郎氏に宛てた彼の手紙によって推測されるところである。

(四)

柏原文太郎氏夫妻がベトナム留学生達から「お父さん」「お母さん」と慕われていたという話は有名である。柏原氏夫妻が彼らに対して如何に深い愛情を懐いていたかを物語っている資料が存しているのでこゝに紹介して置きたい。その一つは外務省の外交史料館所蔵の「安南学生教育顛末」と題する文書である。これは明治四十二年に柏原文太郎が東亜同文会の用箋三枚に毛筆で認めた報告書であつて、そこには一日本人の植民地支配下のアジア人に対する愛情と俠氣とが脉々と息づいているのが感じられる。

可成りの長文であるが左に全文を引用して置く。(句点は筆者の加筆)

明治三十三年北清事変後、支那ニ於ケル所謂文明的新教育ノ勃興ニ刺激セラレ、隣国タル安南ニ於テモ一部人士間ニ新学修養ノ希望ヲ惹起シ、尋テ日露大戦後ニ於ケル我軍連戦連勝国威ノ発揚ニ敬服感嘆ノ念切ナルニ至ルト共ニ、益々我

新教育ヲ仰望欽慕シテ止マサル結果明治四十年ニ至リ、安南人潘是漢ナル者我東京ニ来リ広東人ノ紹介ニ依リ如上ノ念慮ノ切ナルヲ告ケ、学生留学ニ就キ其収容監督ヲ余ニ托セリ、而シテ安南人読書人ハ元来漢文ニ熟シ且ツ其教育ヲ請フ所以ノ趣旨亦タ平穩ナルヲ以テ遂ニ其請ヲ容レ、先ツ四人ヲ引受ケ、更ニ之ヲ東京同文書院ニ転托シ、清国留学生ト同様同院寄宿所内ニ起居シ、同院ニ於テ日本語及中等普通学ノ教育ヲ受ケシムルコト、セリ、此ノ如クシテ四十一年二月ニ至リシニ、此四人ノ学生ハ皆資生温順行動平静ニシテ専心学業ニ従事シタルノ結果ハ成績頗ル良好ニシテ概シテ清国学生ノ上位ニアルノ状態ヲ呈スルニ至レリ。爾後同国学生ノ来リテ留学スル者漸ク多カリシモ其云為動作ノ何レモ真摯穩和ニシテ妄リニ政治等ニ関心シ、又ハ憤慨スル様子ハ毫モ之ヲ認メサルヲ以テ、随テ来レバ随テ之ヲ同文書院ニ転托シ、同年五月ニ至リテハ遂ニ六十余名トナレリ、而テ此内五名ノ年少者ハ之ヲ小石川礫川小学校ニ転托シテ小学校教育ヲ受ケシメタリ、爾後学生等ハ何レモ従前同様ノ態度ニテ頗ル静穩且ツ熱誠ヲ以テ勉強セル者半年余其間更ニ異変アルヲ認メス

然ルニ昨年七月ノ頃ヨリ安南ニ在テハ前記留学生ノ父兄並ニ関係者、河内方面ニ於テ四百余名、西貢方面ニ於テ百余名、仏国官憲ヨリ逮捕セラレタルノ報ニ接シタルヲ以テ数名ノ学生ハ危惧一方ナラス倉皇治装、同年九月事情知悉ノ為メ帰国ノ途ニ上レリ、然ルニ其塔乘汽船ノ西貢ニ入ルヤ、彼等ハ直チニ皆逮捕セラレテ獄中ニ投セラレタル由ニテ、爾来残留ノ学生輩皆其堵ニ安ンスル能ハス、遂ニ本月十三日迄ニ三十余名ノ帰国者ヲ見ルニ至レリ

是等学生窮極ノ真意其何レニアルヤ測ルヘカラスト雖モ、彼等ノ学フ所ハ極メテ平和ナル普通ノ教育ニシテ、専門学ニ於ケル志願モ多クハ農業工業及法律学等ニアリ、且ツ其言フ所ハ安南ノ農工業ノ發達ヲ計リ其政治的地位ノ改善ヲ期スルニアリトノ頗ル穩健ナル希望ヲ有スルカ如ク、平素ノ行状モ真摯ニシテ学業ノ成績モ亦タ良好ニ同文書院留学生中ノ模範タリ、而シテ彼等ノ多クハ安南名族ノ子弟ニシテ、前国王ノ長兄疆樞公ノ奨励ノ下ニ同国土人ノ有志者ニ囑望セラレ、其抛金ヲ学資ニ充テタルハ事実ナルモ而モ仏人ノ称スル疆樞公ノ我邦内ニ潜在スルハ全ク謬見タルヲ免レス、其学

生ヲ直接ニ矜戒スルハ前記書院ノ当事者ニシテ之ヲ監督スルハ不肖ノ責任タリシカ故、今左ニ彼等ノ状態ニ鑑ミ聊カ鄙見ヲ開陳セントス

抑モ彼等ノ我国ニ来学セル意思及ビ其実践上ノ形况ノ頗ル平穩温和ナルコト上述ノ如シ、故ニ之カ教導ニシテ其当ヲ失フコトナカラシニハ我国ニ在テハ、一、安南ノ事情ヲ明ニスルヲ得 二、通商ノ便利ヲ得 三、仏国トノ國際的關係上常ニ干涉ノ機会ヲ得ヘシ、又仏国ニ於テモ果シテ誠意以テ日仏協約ニ準拠シテ之ヲ利用セントセバ 一、我利導ニ依テ彼等ヲシテ過激極端ノ方向ニ逸セシメス 二、之ヲ協約国以外ノ地ニ置クヨリモ寧ロ之ヲ我国ノ監督下ニ信賴スルノ安全ナルヲ見シ、然ルニ今若シ仏国ニシテ安南学生ニ対シ只管高圧ノ手段ヲ以テ之ヲ彼等ノ平和靜穩ナル教育上ニ加ヘ漫リニ彼等ヲ困厄ノ地ニ陥レン乎、其極以テ彼等カ怨恨ノ情ヲ涵養シ反撥ノ心ヲ醸成スヘク、而シテ我邦亦其為スニ任セテ顧ミルナクンバ、或ハ恐ル彼等ハ多ク去テ内外好事者ノ下ニ走ルナキヲ保セス、果シテ此ノ如クナランニハ其結果ハ既ニ学生ニ殃シテ亦兩國共ニ利スルトコロナク徒ラニ事ヲ滋カラシムルニ終ラン耳、想フニ是レ断シテ策ノ得タルモノニアラスト信ス、事実右ノ通ニ付爰ニ顛末ヲ報告仕候、抑モ彼等留学生ハ文明ノ徳沢ヲ仰望シテ我新教育ヲ敬慕シ千里異域笈ヲ負フテ遙々来リ学フノ青年ナリ少年ナリ而テ其云為動作ハ此ノ如クニ平和ニシテ靜穩ナリ、此ノ如クニ熱心ニシテ勉勵セリ、余ハ此ノ顛末ヲ報シ了ルニ臨ミ特ニ当局諸公ノ寛洪測怛ノ雅量ヲ以テ彼等前途ノ愛護ヲ垂レ賜ハンコトヲ懇願スルヤ切ナリ

明治四十二年一月廿五日

柏原文太郎

これが書かれた明治四十二年一月には疆樞侯も潘佩珠もまだ日本に居たのであって、柏原氏は勿論それを知っていた筈である。潘佩珠が日本を去ったのはこれより二ヶ月後であり、疆樞侯も十一月初めには国外に退居している。侯が門司から伊予丸で日本を離れるに当り、柏原氏が如何に手厚い援助を与えたかは、長岡新次郎氏が「日本におけるヴェトナムの

人々」(ヴェトナム亡国史、二六七―八頁)の中に詳しく記しておられるところである。併せて読まれることを希望する。その二は昭和三十四年十月十一日付の柏原安喜子夫人から同郷の知人山田清吉氏に宛てた私信で、それを今回小川博氏を介して発表させて頂いたものである。記して以て御厚意に感謝する次第である。今は亡き安喜子夫人は、この山田氏への返書の中で、しみじみと往時を追懐して次の様に記しておられる。

…又東亜先覚志士紀伝中の御書きぬき拝見致しまして驚きました。私も其当時非常に同情いたし主人と共に出来るだけの援助をいたし百名近い人々の世話にそれこそ借金に／＼を重ね苦心いたして世話をいたし最後それ／＼支那方面へ帰りました節死んでも帰らぬと申五名を九才より十一才位の子供を引取り半生をかけて参りました。とても筆紙では尽せませぬ永いお話、其間に残りました一名は遂に此支那事変当時南支で失ない其委しい消息も聞かれぬと申請けない結果と相成りまして、其頭目で居られました安南皇族阮氏も東京で亡くなり、安南も独立と申ことにはなりましたも其後の消息の知るべき手づるも切れはて主人達の苦心も水の泡と消へはてまして一生涯をかけて働らきました私の子供達五名にかけました将来の望みもたゞ其内二名は其後生死も分らぬことにて尋ねようもなく一切諦らめ話しましても一朝一夕には尽せぬことにてたゞ諦めて居りましたところ計らす御書きぬきを見まして潘是漢氏又阮氏の書類等東京の焼失を免がれました物を取まとめまして一度御目にかかけたいと思ひ立ちまして暇をみて見つけたいと考へて居ります(後略)

越南独立運動の志士や留学生に対する柏原氏夫妻の親身の援助活動は、必ずしも政府や軍部とべったり癒着していたのではなくそこには多分に個人的な自由意志が働いているものと思われるが、右の文中に「主人達の苦心も水の泡と消へはて」とか「私の子供達五名にかけました将来の望みも」云々とあるあたり、ともすると誤解を招きかねない惧れがある。夫人をして「私の五名」と言わせまるで目をかけて世話した若い留学生が誰と誰とであるのか明かではないが、柏原氏

夫妻が彼らに大きな夢を托し期待を寄せたことは事実である。世の中にわが子の将来に望みをかけない親がないのと同様に柏原氏が彼ら留学生に対して何らかの期待をかけたとしても決して不思議ではない。では柏原氏らは一体如何なる望みを彼らに托していたのであろうか。そもそもそこには彼らに恩を施しておいて他日これを政治的に利用しようという下心が初めからひそんでいたのではあろうか。そんな打算的な考えだけで彼らを支援したのだとは思わない。民族解放のためあらゆる苦難に堪えて血のにじむ努力を続けつゝあるベトナムの志士や留学生達の心情と境涯に共感と同情を禁じ得なかつたためではなからうか。何とかして彼らの宿望をとげさせてやりたい。そして民族独立の悲願が達成された暁には、日越親善友好のためにの銕となっもらいたいというのがその真意ではなかつただらうか。

追記

本年三月三十日に再び小川博氏のお伴で成田へ参り、柏原邸の留守をあずかっておられる方から柏原安喜子夫人を中心に紺紵の着物と羽織を着て袴をつけた四人のベトナム少年が並んでいる写真のプリントを頂いて帰った。残念乍ら撮影の年月日も少年達の氏名も不明である。